

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：34509

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K19704

研究課題名（和文）認知症高齢者のためのQOA（活動の質）評価表を用いた教育システムの構築

研究課題名（英文）Development of an educational system using the QOA (Quality of Activity) for elderly people with dementia.

研究代表者

小川 真寛 (Ogawa, Masahiro)

神戸学院大学・総合リハビリテーション学部・准教授

研究者番号：00732182

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、A-QOA（活動の質評価法）学習者の評価スキルの検証等を行う教育システムの構築、A-QOAの教育システムの効果の検証、教育を通してA-QOAの大規模データ収集により評価法の特性を分析することの3点とした。

については、評価スキルのフィードバックシステムを作成し、評価者のより正確な評価につながるような教育システムを作成した。については、座学での研修よりも、実践でA-QOAを活用して、その結果を実感することが、臨床実践能力を高めるために重要なことが明らかとなった。については、活動の質には認知症の重症度、馴染み等が影響することが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究から、臨床実践能力を高める教育は座学だけでなく、臨床での実践が重要であることが明らかとなった。

このことは、臨床教育の重要性が再認識される結果であり、重要な結果と考える。また今回、活動の質評価法の教育システムの作成を行い、多くの作業療法士等の医療職種への研修システムが構築できた。これは今後、認知症高齢者への臨床の質を高める評価である活動の質評価法の普及につながる貴重な機会であった。

そして、活動の質の特徴を明らかにできたことは、今まで臨床知で語られていたなじみや重症度の影響についてデータで結果を示すことができ、意義ある調査になったと考える。

研究成果の概要（英文）：The objectives of this study were three points: (1) to create an educational system to verify the evaluation skills of A-QOA (Assessment of Quality of Activities) learners, (2) to verify the effectiveness of the A-QOA educational system, and (3) to analyze the characteristics of the evaluation method through large-scale data collection of A-QOA.

For (1), we created a feedback system of evaluation skills, and created an educational system that leads to more accurate evaluation for the evaluators. Regarding point (2), it was clarified that it could be more important to utilize A-QOA in practice and to feel the results than in classroom training in order to improve clinical practice skills. For (3), it was confirmed that the severity of dementia, familiarity, and other factors would affect the quality of activities.

研究分野：作業療法

キーワード：A-QOA 認知症 作業療法 観察評価 QOL 活動

### 1. 研究開始当初の背景

認知症高齢者は記憶障害、言語障害等から、自己の心理や意思表示に困難が伴い、本人主体のケアや支援に苦慮することが多い。そのため、申請者らはこの問題の解決に向け、活動の質評価法 ( Assessment of Quality of Activities; A-QOA ) を開発してきた ( 表 1 A-QOA の評価項目と基準 )。本評価法は活動から引き起こされる本人に対する心理社会的効果を観察から評価する。評価法の開発が進み新たな課題として、認知症高齢者に対して本人主体のケア実現に向けて、A-QOA の普及のための教育や評価法の特性の分析が必要と考えた。

表 1 A-QOA の評価項目と基準

活動の遂行	活動時の感情表出
1. 活動を開始する	12. 笑顔が見られる
2. 活動の対象に視線を向ける	13. 高揚する
3. 活動の対象に体を位置付ける	他者との関わり
4. 活動を継続する	14. 活動を通して交流をする
5. 活動に集中する	15. 一緒に協調して活動する
6. 活動に関わる知識や技術を示す	16. 活動に関係した知識・技術を教える
7. 活動中に内容を選択/好みを示す	17. 他者に意思を伝える
8. 活動が円滑に進むように工夫する	18. 他者を思いやる
活動の結果	19. 活動から喚起される感情を他者と共有する
9. 活動の結果として満足感を得る	言語表出
10. 有能感を得る	20. 発語の流暢さがある
11. 次の活動への意欲を示す	21. 回想する

評価基準 4点：例外的に観察される。 3点：観察される。  
2点：観察されるが限定的。 1点：観察されない。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は A-QOA の教授、学習者の評価スキルの検証等を行うことで教育システムの構築、A-QOA の教育前後での調査から教育システムの効果の検証、教育を通して A-QOA の大規模データ収集により評価法の特性を分析することの3点とした。

### 3. 研究の方法

教育方法の策定：評価スキルの検証等を行うことで教育システムの構築

先行研究で作成してきたマニュアルの草案を教育ツールのベースとした。また、実践的な教育、効果的学習に向けて、実際に認知症高齢者の活動場面の動画を収集し、編集し、研修での観察評価に用いた。さらに、効果的な学習を促せるフィードバックシステムを作成するために、データのフィードバックのシステムの作成を行った。

A-QOA は観察による評価であるため、個人によるバラつきや特徴的な観察視点がある可能性があると推測された。上記特徴を把握したうえで、適切なフィードバックを行うことが、バラつきを減らし評価の質の向上につながると考えた。研究協力者が取得したデータを用いて、そのデータの妥当な範囲を検証し、その結果からフィードバックするシステムを構築した。

教育前後での調査から教育システムの効果の検証

対象者は A-QOA 研修会を受講した作業療法士とした。対象者には 2 日間の A-QOA 研修会を受講してもらい A-QOA の評価を説明し、動画を利用して評価の実施練習を行った。A-QOA 研修会の後に受講者は A-QOA を臨床で使用し、3 か月後までに 20 回以上の A-QOA の評価の経験を積んでもらった。つまり、研修での評価体験をし、その後、実臨床場面で A-QOA の評価を実施するという経験をしてもらった。

受講前・後・受講後 3 か月後に調査を実施した。調査の内容は、本教育システムが臨床実践能力に効果があるかを調べるため、研究対象者の実践への満足度、臨床における対象者視点の程度、臨床で活動を用いる技能の自己認識の 3 点について聴取した。これらの質問項目は、The sense of competence questionnaire ( SCQ ) の支援者として自身のパフォーマンスの満足度の 12 項目、VIPS フレームワークシート ( パーソンセンタードな視点の指標 ) の 8 項目、A-QOA 受講者のアンケートから得られた A-QOA 研修会受講後に実践で向上すると考えられる技能 6 項目 ( A-QOA の技能 ) の合計 26 項目で構成した。回答は、各質問の同意の程度を 4 件法 ( 同意できる、やや同意できる、やや同意できない、同意できない ) で答えてもらった。

A-QOA の特性の分析

研究協力者の所属施設等を利用している認知症のある人を対象に、臨床で行われている活動について A-QOA を用いて評価した。それらの活動は、本人にとって意味があり効果がある活動、効果の少なく意味の少ない活動、の 2 つとし、A-QOA を用いて観察評価した。

集積した A-QOA のデータから、本課題では 1) 認知症の重症度による A-QOA の影響、2) 観察した活動に関わるなじみの要素(環境・人・活動)が A-QOA に与える影響、3) 評価者(研究協力者)が考える対象者にとっての意義と A-QOA の結果との関係について分析をした。

#### 4. 研究成果

教育方法の策定：評価スキルの検証等を行うことで教育システムの構築

29 名の研究協力者 1 名あたり 20 例の評価データを提出してもらい、合計 570 例のデータが得た。データの適合度の分析には Rasch Model を用いた。データの適合度の判定基準として、5~10% 程度の不適合のデータを検出できる基準値を設定すべく基準値を探索した。Rasch Model の結果の Outfit Mean-Square の最大値を基準とすると 1.6 で 64 データ、1.7 で 40 データが不適合だった。このデータ分析結果から Outfit Mean-Square が 0.5-1.7 であることを許容範囲とした。この結果を用いて、分析結果のフィードバックシステムを作成し、許容範囲を逸脱するデータに対してフィードバックを行い、評価者のより正確な評価につながるような教育システムを作成した。このような観察評価の教育システムの構築はあまり類のないシステムであり、妥当なデータの収集ができる評価者養成に寄与できる新規性の高いシステムと考える。

教育前後での調査から教育システムの効果の検証

対象者は A-QOA 研修会に参加した 86 名の作業療法士であった。

SCQ を研修前・後と 3 か月後の 3 つの時系列で比較した結果、12 項目中 9 項目で有意な差が認められ、研修会後に臨床実践能力が高まっている結果であった。下位検定から、研修前と研修 3 か月後の間に 9 項目で有意な差がみられた。一方、研修会後から 3 か月後の間には 4 項目、研修前・後での比較の結果は有意な差が認められなかった。

VIPS の項目を研修前・後と 3 か月後の 3 つの時系列で比較した結果、8 項目中 4 項目で有意な差が認められ、研修会後にパーソンセンタードな視点が高まっている結果であった。下位検定から、研修前と研修 3 か月後の間に 4 項目で有意な差がみられた。一方、研修会後から 3 か月後の間には 3 項目、研修前・後での比較の結果は 1 項目のみ有意な差が認められた。

A-QOA の技能を研修前・後と 3 か月後の 3 つの時系列で比較した結果、6 項目全てで有意な差が認められ、研修会後に A-QOA で引き出される技能が高まっている結果であった。下位検定から、研修前と研修 3 か月後の間に 6 項目全てで有意な差がみられた。一方、研修会後から 3 か月後の間には 5 項目、研修前・後での比較の結果は 1 項目のみ有意な差が認められた。

これらの結果から、A-QOA 研修会の座学での研修よりも、実践で A-QOA を活用して、その結果を実感することが、研修受講者の実践能力やパーソンセンタードな視点の向上につながることを示唆された。そのため、臨床家の教育は座学や模擬的な演習のみならず、それらを現場で活用することが、臨床家としての実践能力を高めるためには重要なことが明らかとなった。

#### A-QOA の特性の分析

分析対象者は認知症のある人 619 名の 1228 活動であった。対象者の属性と活動の種類を表 1 と 2 に示す。対象者の年齢は  $84.0 \pm 8.2$  歳であった。

表 1 対象者の重症度

対象者の重症度の分類	活動数
軽度 (FAST2,3,4)	438
中程度 (FAST5)	325
重症 (FAST6,7)	463
不明	2

表 2 活動の種類

活動の種類	活動数
読書や将棋などの知的活動	222
レクや体操などの体を使った活動	319
手工芸や歌などの創作表現活動	479
回想法などの会話を中心とした活動	87
ADLやIADLなどの活動	113
その他の活動	8

#### 1) 認知症の重症度による A-QOA の影響

認知症の重症度による A-QOA の結果への影響を分析した結果、A-QOA の総スコアの指標となる Probit 値において軽度、中程度、重症間の 3 群間で有意差が認められた。また下位検定においても全ての群間で有意差が認められ、重症になる程 A-QOA の数値が低くなることが明らかとなった。つまり、認知症が重度になると、活動を行った結果としての反応が乏しくなり、また対人交流なども減少しやすいことを示した結果であると考えられる。

#### 2) 観察した活動に関わるなじみの要素(環境・人・活動)が A-QOA に与える影響

環境・人・活動の 3 種類のなじみの要素について A-QOA の結果に与える影響を比較した。活動に伴う環境・人・活動それぞれの経験の有無によって分けた群間で比較した。全ての要素で経験があることが A-QOA の得点に有意に影響することが分かり、経験があることが活動中の良い状態を引き出すことが確認できた。なじみが認知症のある人に重要であることは言われているが、本研究ではデータから環境・人・活動というなじみの要素が認知症のある人に良い影響を及ぼすことを証明した貴重な結果であると考えられる。

### 3) 評価者(研究協力者)が考える対象者にとっての意義と A-QOA の結果との関係

評価者に行われた活動が認知症のある人本人にとってどの程度意義があると判断されるかについて質問をし、リッカートスケールの 5 件法で回答を得た。「本人にとっての意義」を評定不能と判断した 59 場面を除き、1169 場面を分析対象とした。A-QOA の合計点と、観察者が判断した「本人にとっての意義」の相関係数は 0.74 であり、強い相関関係が認められた。このことから、A-QOA は評価として観察者が感じている本人にとっての意義をより客観的な手法で数値化できる可能性が示されたと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Ogawa M, Shirai H, Nishida S, Tanimukai H	4. 巻 75
2. 論文標題 Rasch Analysis of the Assessment of Quality of Activities (A-QOA), an Observational Tool for Clients with Dementia	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 American Journal of Occupational Therapy	6. 最初と最後の頁 7501205040
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5014/ajot.2021.039917	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 白井はる奈, 小川真寛, 西田征治	4. 巻 15
2. 論文標題 認知症のある人の活動の質を高める要因の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 佛教大学 保健医療技術学部論集	6. 最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川真寛	4. 巻 28
2. 論文標題 リハビリテーションを拒否する認知症高齢者の要因と対応	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床老年看護	6. 最初と最後の頁 27-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川真寛, 白井はる奈, 西田征治	4. 巻 54
2. 論文標題 活動の質評価法（A-QOA）開発の取り組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 作業療法ジャーナル	6. 最初と最後の頁 88-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ogawa M, Uchiyumi A, Sato S, Hamakawa Y, Kobashi M, Aoyama T, Tanimukai T	4. 巻 18
2. 論文標題 Preliminary Study of assessing cognitive impairment in older patients with chronic obstructive pulmonary disease by using a cognitive functional assessment tool via a touchscreen personal computer.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Multidisciplinary Respiratory Medicine	6. 最初と最後の頁 892
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4081/mrm.2023.892	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西田征治、小川真寛	4. 巻 273
2. 論文標題 活動の質評価法 (A-QQA) を用いた認知症の人のQOL	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Monthly Book Medical Rehabilitation	6. 最初と最後の頁 19-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 土橋大基、小川真寛
2. 発表標題 支援者への作業の振り返りを通して作業周縁化が改善した一事例 ~ A-QQAの概念を用いて ~
3. 学会等名 第7回日本臨床作業療法学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 A-QQAの活用により、BPSDが改善し、活動の質が高まった一事例 重度認知症のある女性への根拠ある作業療法実践
2. 発表標題 坂本千晶、小川真寛、西田征治、白井はる奈
3. 学会等名 第55回日本作業療法学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小川真寛
2. 発表標題 パーソン・センタード作業療法
3. 学会等名 第41回近畿作業療法学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小川真寛
2. 発表標題 認知症のある人と家族への支援 活動の質評価法（A-QQA）の紹介
3. 学会等名 第55回日本作業療法学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小川真寛，西田征治，白井はる奈
2. 発表標題 活動の質評価法（A-QQA）の開発 ラッシュモデルを用いた構成概念妥当性の検討と評価得点の定量化の試み
3. 学会等名 第6回 日本臨床作業療法学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小川真寛，白井はる奈，西田征治
2. 発表標題 認知症をもつ方の活動の質を評価するツールの開発 活動の質評価法（A-QQA）の紹介
3. 学会等名 第20回日本認知症ケア学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小川真寛, 白井はる奈, 西田征治
2. 発表標題 活動の質評価法 (A-QOA) の開発とその研修会の有用性の検討
3. 学会等名 第53回日本作業療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomohiko Yoneyama, Masahiro Ogawa, Haruna Shirai, Seiji Nishida, Chiaki Sakamoto
2. 発表標題 Differences in Response during Activities in Patients with Dementia -Analysis of Comparison among Three Groups Classified by Severity-
3. 学会等名 WFOT Congress 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Haruna Shirai, Masahiro Ogawa, Seiji Nishida, Chiaki Sakamoto, Tomohiko Yoneyama
2. 発表標題 Exploring the practice guidelines that promote quality of activities in persons with dementia: A qualitative study
3. 学会等名 WFOT Congress 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 白井はる奈, 小川真寛, 西田征治, 坂本千晶
2. 発表標題 認知症のある人の活動の質 (Quality of Activities : QOA) を高めるプラクティスガイドの開発
3. 学会等名 第56回日本作業療法学会
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 米山智彦, 長島靖子, 星野ひかる, 古川夏美, 小川真寛
2. 発表標題 認知症重症度の違いによる意味のある活動時に着目すべき観察視点の探索
3. 学会等名 第56回日本作業療法学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小川真寛	4. 発行年 2020年
2. 出版社 メジカルビュー社	5. 総ページ数 331
3. 書名 認知症をもつ人への作業療法アプローチ 視点・プロセス・理論 第2版	

1. 著者名 小川真寛, 白井はる奈, 坂本千晶, 西田征治	4. 発行年 2022年
2. 出版社 クリエイツかもがわ	5. 総ページ数 137
3. 書名 A-QOA(活動の質評価法)ピギナーズガイド 認知症のある人の生活を豊かにする21の観察視点と20の支援ポイント	

〔産業財産権〕

〔その他〕

A-QOA HP <a href="https://www.a-qoa.com/">https://www.a-qoa.com/</a> 活動の質評価法 <a href="https://www.a-qoa.com/">https://www.a-qoa.com/</a>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------